

2024年3月3日

主題「敵を愛しなさい」

ルカの福音書 6:27-30

## 序

本日の説教に入る前に、先週の説教で、訂正をしておくことがあるので、お伝えします。先週の説教で、「天において慰めを受ける」「天において飢えるようになる」「天において泣き悲しむようになる」とお話ししました。これは意味合いとしては、「死後において」という意味で語ったのですが、誤解を招く表現でした。この世でイエスを信じなくても「天の御国」に行き、そこでどんな報いをうけるのか、というような印象を受けたかもしれません。それはもちろん違いますので、「天において」と語った箇所を「死後において」と訂正させていただきます。申し訳ありません。

それでは、御言葉に入っていきます。今日も「平地の説教」からです。本日は、「敵を愛すること」についての教えです。非常に厳しく、難しい教えであります。主イエスからのことばをともに受け取っていきましょう。それでは、27節、28節をご覧ください。

### 1. 敵を愛しなさい

*しかし、これを聞いているあなたがたに、わたしは言います。あなたがたの敵を愛しなさい。あなたがたを憎む者たちに善を行いなさい。あなたがたを呪う者たちを祝福しなさい。あなたがたを侮辱する者たちのために祈りなさい。*

本日の箇所では「敵を愛すること」についての教えが語られています。しかし、このイエスの教えを聞いて、私も含めてだと思いますが、皆さんも戸惑いを覚えるのではないかと思います。この箇所は聖書の中で有名な箇所であるからこそ、聞いたこともあるし、知っている箇所。だからこそ、この教えと向き合うことの難しさを私たちは知っていると思うんです。しかし、私たちはこの向き合うことの難しいイエスのことばに背を向け、目を逸らすのではなく、心を向けていきたいのです。なぜ、イエスはこのように言われるのか、その本質を捉えていきたいのです。

それでは、共に考えていきたいのですが、まずここで言われる「敵」とは誰でしょうか。それは27節、28節にあるように、「あなたがたを憎む者たち」、「あなたがたを呪う者たち」、「あなたがたを侮辱する者たち」です。

そして、ルカの 6:22 で言われる迫害する者たち、つまり「あなたがたを憎むとき、人の子のゆえに排除し、ののしり、あなたがたの名を悪しざまにけなす」、そのような者たちを「敵」と言われているわけです。そして、本日の箇所ではイエスは「あなたがた」に語られています。この「あなたがた」というのは、イエスの教えを求めてきた人たちです。ですから、ここで言われる「敵」というのは、キリストに従うゆえに、私たちが憎み、呪い、侮辱し、迫害する者たちを指しているわけです。このような「敵」に対して、これまではどのような考えを持っていいのかがマタイの福音書 5:43 に記されています。

**『あなたの隣人を愛し、あなたの敵を憎め』と言われていたのを、あなたがたは聞いています。**

これが当時の当たり前の考え方であったわけです。そしてこの考え方は、現代も同じ考え方を持っていると思います。そもそも、隣人を愛し、敵をも愛する、という考え方が常識からかけ離れている。しかし、それでもイエスは敵を愛しなさい、と言われる。しかも、このイエスの「敵を愛する」という教えは、表面上、上っ面で、自分の敵と「うまくやっていく」というものではないのです。そうではなく、心から敵を愛し、善を行い、祝福し、祈れ、というのです。

なぜ自分を憎み、呪い、侮辱するような者たちを愛さなくてはならないのか、と欲してしまふ。それが私たちの本心ではないでしょうか。そんなことしたくない、と思うのが私たちのリアルだと思うのです。なぜ敵を愛するのか、それについては次の箇所を見ていく中でその答えが見えてきます。それでは、29 節、30 節をご覧ください。29 節から 30 節。

## 2. 求める者には与えなさい

**あなたの頬を打つ者には、もう一方の頬も向けなさい。あなたの上着を奪い取る者には、下着も拒んではいけません。求める者には、だれにでも与えなさい。あなたのものを奪い取る者から、取り戻してはいけません。**

この教えもまた有名なんですけれども、向き合うことの難しい教えです。この 29 節は自分の持っている何かを与える、というよりも、無抵抗の教え、とも言えるかもしれません。自らの頬を打つ者に対して、もう一方の頬を向けること。上着を奪う者には、下着も拒まないこと。これらは、与える、というよりかは抵抗しない、復讐しない、ことが語られています。そして続く 30 節では、さらにやられたことに対して、無抵抗で復讐しないばかりではなく、求める者には与えなさい、奪い取る者から取り戻してはならない、と言っている。

ここで「上着」と「下着」のことばが出てきますけれども、少し説明をしておきたいと主  
ます。ここで「上着」と訳されていることばは、いわゆる丈の長い外套、ローブのことを指  
しています。そして、「下着」と訳されていることばは、いわゆる私たちの考える「肌着」の  
ことではありません。そうではなく、「上着」の下に着る短い上着やシャツのことを言ってい  
ます。今の私たちで考えるなら、コートを取られたら、その下に着てるカーディガンやシャ  
ツも拒んではいけない、と言った感じであるわけです。

さて戻りますが、ここで言われているイエスの命令というのは、意味としては非常に分か  
りやすい。端的に言うならば、もし私たちが侮辱を受けたとしても、復讐しようとしてはな  
らない。そして、必要ならさらに侮辱を受ける用意をしなければならない、ということです。  
そして、30節における自分を与えることについては、自分の持っているものに執着するの  
ではなく、求める者には与え、奪う者から取り戻してはならないと言われている。

しかし、この29節、30節に命じられていることを文字通り、本当に実行するのであれば、  
私たちは一文なしになり、生活すらできなくなってしまう。そして時には命さえ脅かさ  
れてしまうことになってしまいます。果たしてここでイエスがそうなることを求めておられ  
るのか、と疑問が湧いてきます。そして、不当に奪うことを許し、誠実に生きている者が奪  
い取られていくことが求められているのでしょうか。決してそうではありません。ですから、  
ここでイエスが本当に伝えたいことは何かを考えなくてはなりません。

それは、本当に求める者がいたときに、そして愛によってそれが必要だ、となるならば、  
すべてを与え、奪われる用意ができているか、と問われているのである。しかも、「与える」  
という言葉は、継続的な意味を持っています。ですから、自分の気分や感情によって衝動的  
に「与える」のではなく、それらのことを与え続ける状態を持ち続けていなさい、とイエス  
は語っているのです。それではこれらのイエスの教えを私たちはどのように理解し、私たち  
の生活の中で実行し、実現するのか。それは、イエス・キリストの模範に倣うということに  
集約されます。1ペテロ 2:21-24にはこのようにあります。

## 結論 キリストを模範として

このためにこそ、あなたがたは召されました。キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、その足跡に従うようにと、あなたがたに模範を残された。キリストは罪を犯したことがなく、その口には欺きもなかった。ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、脅すことをせず、正しくさばかれる方にお任せになった。キリストは自ら十字架の上で、私たちの罪をその身に負われた。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるため。その打ち傷のゆえに、あなたがたは癒やされた。

ここに「敵を愛する」答えがあります。この箇所にははっきりと語られているように、キリストは「ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、脅すことをせず、正しくさばかれる方にお任せになった」。これが私たち、イエスの弟子がイエスに求められていることです。これらの苦しみのすべてを神に委ね、お任せになったイエスの足跡に従うようにと、私たちのために模範を残してくださったわけです。ここに私たちは従っていきたいのです。そして、本日の箇所にあるように、この模範に従う時に、イエスと同じ心になれるように願っていききたい。つまり、敵を愛することを表面的に、上っ面で、というのではなく、またこの教えに従えない自分に落ち込み諦めるのでもなく、イエスが愛されたように、私たちも、その足跡を踏みしめていきたいのです。ですから、イエスを信じるゆえに、ののしられ、憎まれ、苦しめられ、罵倒された時に、主の十字架のもとに集い、主を見上げたい。傷ついた心をおさまらない怒りを、同じように罵りの言葉で返し、鬱憤(うっぷん)を晴らすのではなく、主の十字架からくる愛で私たちの心を満たしたいのです。

そんなこと言っても、私たちの現実には悔しいし、辛いし、我慢ならない。そうやって私たちの心は叫ぶかもしれません。しかし、イエスの十字架からくる愛は、決して綺麗事の愛ではありません。イエスは、憎まれ、苦しめられ、罵倒された。痛み、悲しみ、血を流し、父なる神に叫びながらも、無抵抗を貫き、私たちに真のいのちを与えてくださった。私たちはこの愛にもっともっと信頼したいのです。ですから、私たちは、ことばや口先だけではなく、行いと真実をもって、この愛を実践していききたいのです。私のため、他の誰かのため、ではなく、イエス・キリストのゆえに、するのです。でも心から喜んで、敵を愛す、とは言えない今の私がいるかもしれません。そんな出来た人間じゃないです、と思うかもしれません。そうなんです、自分の力ではこんなこと決して出来ないことです。しかし、そこに気付いたら、私たちは一步を踏み出すことができる。イエス・キリストという模範があり、イエスが私の主だから、私は、「敵を愛する」という到底出来ないと思うようなこの生き方に、向き合うことができる。

イエスを信じるゆえに、私を憎み罵倒する人に出会うとしたら、その人の祝福をそっと祈る私でありたいのです。苦しいことかもしれない、喜んでそれができないかもしれない。それでも、そうやってイエスの心に生きていくとき、イエスの似姿に、私たちは少しずつ少しずつ変えていただけるのです。キリストの名のゆえに、キリストを信じるゆえに受ける傷がある。その傷を見て、なんと名誉な傷であろうかと躍り上がって喜びたい。なぜなら、イエスは十字架の打ち傷のゆえに私を救ってくださった。それと同じように私もその打ち傷を負えたのだから。そして、天においてやがてイエスとお会いするとき、イエスはその傷に触れ、「よくやった。良い忠実なしもべだ」と言ってくださる。私たちはこのお方の愛を知っているから、敵を愛することを諦めないのです。

何くそと、こんなやつ、と思うときもある。しかし、その苦しみと怒りの中で、十字架のみもとに進み出て行きたい。イエスの傷から流れる血潮を思い起こしたい。そして、自らの傷を幸いとしたい。私は主のものとされている。そして、この目の前にいる敵も主にあって、変えられることを願う者として生きたいのです。私たちに与えられた福音は、私たちの想像をはるかに超えるいのちのことば。私の愛したくないという思いを、正しくさばかれる方にお任せし、与えられた愛に生きていきたい。そして、私たちがこのイエスの語られる愛を体現していく教会として歩んでいけるよう祈り求めていきましょう。